

『偶成』 朱熹

学問の道は待ってくれない

偶成 朱熹 偶成 朱熹

少年易老学難成 少年老い易く 学成り難し

一寸光陰不可輕 一寸の光陰 輕んず可からず

未覺池塘春草夢 未だ覺めず 池塘春草の夢

階前梧葉已秋聲 階前の梧葉 已に秋声

【語句の意味】

偶成 成 二 了 了 出来た。

偶詠・偶吟・偶作などと同意で、「偶」はたまたま、偶然にという意味。特に題を付けないで出来た詩。内容が学問・勉学を勧める詩であるので、この詩を「勸学」と題している詩集もある。

少年 二 わかもの。中国では十代の半ばから二十代の半ば位までを少年というので、日本でいう「少年」の語感より年が上である。

一寸 二 ほんのわずかな。

光陰 二 「光」は昼「陰」は夜 転じて歳月。

池塘 二 「塘」は堤。池の堤。

春草夢 二 春先の草花のような若い頃の将来の希望に満ちた

心持ち。

春草はここでは若者。

階前 二 「階」はきざはし。(階段)

階段の前の庭さき。

梧葉 二 「梧」は青桐。

秋声 二 秋風の音。

【詩の意味】

若者はアツという間に年をとってしまい、学問はなかなか完成しがたい。だから少しの間でも軽々しく過ごしてはならない。

池の堤の若草の上でまどろんだ春の日の夢がまだ覚めないうちに、庭先の青桐の葉には、もう秋風の音が聞こえるように、月日は速やかに過ぎ去ってしまうのである。

【鑑賞】

朱熹にして然り、少年諸君よ、一刻を惜しんで勉強しよう

この「偶成」の詩では、第一句と第二句は今でも親や教

師が口にしような若者向きの学問のすすめである。人間の生命は短いし、また、学問を成就しようとするためには、一分一秒の時間も惜しんで勉強しなさいと訓えている。

第三句と第四句は具体的な比喻が説得力をもっている。若さをむさぼり楽しんでいううちに秋風が吹いてきて人生は終わりに近づくのですよと諭している。いわゆる勧学の詩として最も親しまれている。

この第三・第四句は春と秋の風景を、それぞれのぞかせている。春は池辺の草花、秋は桐の葉を吹き鳴らす風の声で詩の情緒を盛り上げている。葉はやがて秋風によって散らされる。しかし、ここでは、過ぎ行く時間を惜しむという意味で、油断をしていると、何時しか白髪の老人に成ってしまう。十分の勉強にいそしめなかったと後悔する事の無いように戒めている。

【作者】宋代詩人

朱熹（一一三〇～一二〇〇）

南宋の哲学者。朱子学の創始者。字は仲晦また元晦。名は熹。号は晦庵・晦翁・遜翁・考亭・紫陽など。朱子はその尊号である。本籍は安徽省婺源（江西省）だが、実際に生まれ育ったのは福建省建州、尤溪であった。詩人として知られた父の朱松は、金との和議に反対して中央官界から追放された。十四歳で父を失い、母の訓育によって勉強

した。その努力が実り、紹興十八年（一一四八）十九歳にして進士科に合格。李延年に師事した。福建省同案の主簿となつたが、在任四年で帰郷して母を養い、暇を見ては李延年を訪ねて疑を質した。家居すること二十年、その後、淳熙二年（一一七五）呂祖謙とともに「近思録」を編纂。また、陸九淵（陸象山）兄弟と鵝湖寺（江西省鉛山県にあり）で論争したが、互いに自説を主張して譲らなかつた。同五年（一一七八）陶淵明の故郷である江西省南康軍（江西省星子県）の知事となり、初唐の賢人李渤の白鹿洞書院を復興して学則を制定した。同八年（一一八一）提挙両浙東路常平茶塩公事に命ぜられ、浙東地方に起こつた大飢饉を適切な処置で救済した。また湖南省の刑獄公事（警察庁長官）もつとめた。

慶元元年（一二〇〇）病をもつて没す。享年七十一歳。宝謨閣学博士を贈られ、文公と諡名された。世に朱文公といわれる。

【備考】

同趣旨の古詩が「古文前集」の中に「勸学文」として有り又本会では教本Aに、「勸学」の詩が採用されている。二首ともにこの詩を味わうと作者の考え方もより伝わると思われるので改めて紹介する。

勸學文 朱熹

勸學文 朱熹

勿謂今日不學而有來日 謂う勿かれ今日学ばずして来日有り
勿謂今年不學而有來年 謂う勿かれ今年学ばずして来年有り
日月逝矣歲不我延 日月逝きぬ歲我と延びず
嗚呼老矣是誰之愆 嗚呼老いたり是れ誰の愆ぞや

勸學 陶淵明 勸學 陶淵明

盛年不重來 盛年重ねて来たらず
一日難再晨 一日再び晨成り難し
及時當勉勵 時に及んで當に勉勵すべし
歲月不待人 歲月は人を待たず

〔通訳〕

今日学ばずとも明日があると言つてはならない。
今年学ばなくても来年があると言つてはならない。
月日は過ぎて延してはくれない。
あゝいつの間にか自分も年老いてしまった。一体これは誰の誤りであるか。

〔参考〕

「偶成」の作者が朱熹ではないという異論があるが…
朱熹の詩文集にはこの作品「偶成」が見当たらない。
そのことはかなり以前からある。平成年代に入ってから、

近世以前のいくつかの詩文集にほぼ同じ内容の詩が、異なる題と作者名を伴って収録されていることが話題になっている。
しかし、作者云々について、関吟総本部ではもちろん、吟界全般には朱熹となつてゐることからそのまま朱熹としておく。

尚、この議論については専門家に任せたい。



朱熹

